

# 第35回くるめの考古資料展

2010|11.13(土)-12.5(日)

開催時間 9:00 ~ 17:00 (ご入場は 16:30 まで)  
期間中無休 / 入場無料

## ■城下町ウォーク 11月23日(火) (勤労感謝の日)

「京隈界隈～登城コースを歩こう」

9:00 ~ 12:00 JR久留米駅東口集合・西口解散

定員30名 参加費無料 ※事前申し込み要

申込先 / 久留米市埋蔵文化財センター Tel.0942-34-4995

## ■ギャラリートーク・ぶち講座 (全4回)

開催期間中の日曜日 10:00 ~ /14:00 ~ (15分程度)

11月14日(日) 「幕末の食卓をめぐる風景」

11月21日(日) 「幕末～近代の遊びあれこれ」

11月28日(日) 「発掘調査から見た明治維新」

12月5日(日) 「鉄道の開通と久留米」

※事前申し込み不要、直接展示会場へお越し下さい。

## ◆坂本繁二郎生家イベント

1 企画展「幕末・明治期の坂本繁二郎生家」

11月16日(火)～12月19日(日) ※月曜日は休館

開館時間 10:00 ~ 17:00

2 講演会

11月21日(日) 13:30 ~ 15:00

講師：谷口治達氏 (田川市美術館館長)

会場：石橋美術館 1F 講座室

3 呈茶会

12月3日(金)・4日(土)・5日(日) 10:00 ~ 15:00

問い合わせ先 / 久留米市文化財保護課 Tel.0942-30-9225

## ◆有馬記念館リニューアルオープン

開館記念特別展

11月28日(日)～平成23年2月21日(日) ※火曜日は休館

開館時間 10:00 ~ 17:00

※但し、11月28日(日)のみ 12:00 より開館

問い合わせ先 / 久留米市文化財保護課 Tel.0942-30-9225

幕末の動乱と近代久留米の幕開け

久留米藩からくるめへ

久留米市埋蔵文化財センター

# 幕末の動乱と近代久留米の幕開け

## ■ 徳川 300 年の終焉

長らく続いた徳川三百年の治世も、黒船来航という外圧により激動の渦に巻き込まれることになりました。嘉永6年（1853）、来航したペリーの開港要求に屈した幕府は、朝廷の許可を得ないまま日米修好通商条約を締結し開国します。これによって尊皇運動と攘夷運動が高まり、権威が失墜した幕府に対する討幕運動と結びつくこととなります。幕府は先手を打って活動家たちを弾圧しますが（安政の大獄）、逆に安政7年（1860）の桜田門外の変により大老井伊直弼が暗殺され、流れは倒幕へと向かうかと思われました。

## ■ 真木和泉一派の討幕運動

久留米からも水天宮の神官であった真木和泉とその一派が、寺田屋事件・七卿落ち・天誅組の乱・筑波山拳兵・禁門の変など、一連の倒幕運動に参加します。しかし幕府と朝廷の協力関係により事態を開明しようとする公武合体派が台頭する中、失敗に終わり真木も自刃します。

## ■ 開明派による藩政改革

久留米藩でも文久3年（1863）にはこうした情勢を踏まえ、国老有馬監物が国是を公武一和とします。開明派の中心人物であった今井栄が江戸詰めから国元へ呼び戻されると、殖産興業を柱にその収入で富国強兵を実行する開明政策を推進します。今井は佐賀藩から田中久重（からくり儀右衛門）を呼び戻し、蒸気船の購入・運用、大砲・小銃の生産・購入など軍備の洋式化を進めました。

## ■ 尊攘派の復権

しかし、薩摩・長州藩が盟約を結ぶと、流れは一気に倒幕へと加速します。慶応3年（1867）、ついに將軍徳川慶喜が大政奉還、直後に発せられた王政復古の号令により、翌年1月戊辰戦争へと突入します。

15代藩主有馬頼成は前佐賀藩主鍋島閑叟の呼びかけに応じ、幕府復興に協力するため上京を決意します。ところがその準備の最中、公武合体・開明派の参政不破美作が、小河真文・佐々金平ら尊攘派青年の襲撃に遭い殺害されると藩論は一変し、公武合体・開明派の推進者らは処罰、水野正名ら幽囚中の尊攘派指導者が復権しました。久留米藩はただちに倒幕軍に参加し、500名の藩兵や諸隊が関東や東北で戦いました。函館戦争へも200名が転戦し、佐々金平も戦死しています。

この間、国元では藩政の改革が行われ、水野正名が最高職に就き、尊攘派や中立派を藩政の中枢に据える人事

が実施されました。しかし、開明派の殖産興業政策は基本的に踏襲され、同時に行われた軍制改革もかつて今井らによって提案されたものが土台となっていました。

なお、明治2年（1869）、幽囚中の今井栄ら公武合体・開明派指導者達は「国是の妨げ」という理由で屠腹させられています（殉難十志士）。

## ■ 反政府運動と藩難事件

旧幕軍が敗北し、版籍奉還を実行させた明治新政府は、その方針を現実的な開国和親・近代化政策に転換しつつありました。一方、久留米藩では、藩論として東京遷都・開港・郡県制に反対であり、尊攘派青年達も尊攘回復運動を起こすなど、反政府的傾向が強まっていました。

こうした中、山口藩での諸隊反乱を指導した大楽源太郎ら元奇兵隊員を領内に保護隠匿した小河と古松簡二ら尊攘派は、明治3～4年にかけて各地の同志と連絡をとって反政府拳兵計画を練り、新政府への徹底抗戦を藩庁に訴えました。これに対して新政府は、藩を挙げて陰謀に加担したとして、藩知事有馬頼成は謹慎、以下、水野大参事、小河・古松など首謀者・関係者を大量に逮捕・処分し、新政府を震撼させた藩難事件は鎮圧されたのです。

## ■ 近代の幕開け

明治4年、ついに廃藩置県。筑後は久留米・柳川・三池の三県となりますが、程なく合併し三潞県が誕生しました。同9年、福岡県と合併。その間、散髪・脱刀が自由となり、学制公布、太陽暦の採用、徴兵令の制定、地租改正、秩禄奉還、廃刀令など、人々の生活を根本から変える政策が矢継ぎ早に出されました。そして、明治22年（1889）4月、久留米市誕生。翌年3月、京町（旧称京隈小路）に九州鉄道の停車場（現 JR 久留米駅）ができ鉄道が開通すると、江戸時代以来の久留米の街並みと景観は大きく変わるようになったのです。

来春新幹線が開業する JR 久留米駅周辺では、その開通にともなう事前の発掘調査を平成 17 年度より行ってきました。現在の京町一帯はかつて、久留米城の南西側にあたり「京隈小路」と呼ばれる中級武士の屋敷地が建並ぶ地域でした。

今回は、京隈侍屋敷遺跡の調査成果を中心に、この激動の幕末明治期における人々の生活に焦点をあてます。百数十年後の現代に姿を現した、先人たちの暮らしに思いをはせていただければ幸いです。

江戸時代、久留米 21 万石の城下町として栄えた町並みや建物も、近代化の波や太平洋戦争末期に空襲を受けて、現在その姿を留めているものはほとんどありません。わずかに久留米城の石垣や旧三島家長屋門がその面影を残しています。その様な中で、武家屋敷の姿を伝えているのが、坂本繁二郎生家です。

近代洋画界の巨匠として知られる繁二郎の生家は、江戸時代後期に建てられた武家屋敷で、藁葺と瓦葺建物が結合した 2 階建ての建物です。「座敷・次の間」などの接客空間と「茶の間・台所」などの生活空間とが分かれた武家屋敷の構造を残しています。また庭には、瓦を敷きつ



1 大形穴蔵の例。何を貯蔵していたのだろうか。

めて作られた園路や雨落ちなども発見されています。

城下町の発掘調査では、建物自体が発見された例はありませんが、武家屋敷の庭の活用方法やそこで使われたと考えられるものが発見されています。敷地内からしばしば確認されるのが、穴蔵とごみ穴です。穴蔵は、地下式の収納施設で階段が付属します。ごみ穴は、文字通りゴミを捨てるための穴で、割れた茶碗や食べかすなどが捨てられています。当時は、自家で処分するのが基本であったため、このように庭に穴を掘って埋めていたのです。

また、江戸後期から幕末頃の遺物の中には、植木鉢が多く見受けられます。植木や盆栽の流行とともに庭で盛んに植物を育てていた状況がよくわかります。



2 現在公開中の坂本繁二郎生家の裏庭（京町）



3 城下町から大量に発見される植木鉢。持ち運びができ、町屋などの狭い場所でも花卉などを楽しむことができる。幕末に藩士坂本元蔵がくるめつつじを創りはじめ、瞬間に同好の人々へその輪がひろまった。

# 食べる・呑む

江戸時代初めごろの肥前国有田において、国内で初めて磁器生産が開始されました。中ごろを迎えると、磁器はそれまでの海外指向から国内向けに作られるようになります。終わりごろには、都市部だけではなく、農村域まで流通するようになりました。

ここ久留米藩も例外ではありません。京隈侍屋敷遺跡における調査ではたくさんの磁器が出土し、その中には食膳具として用いられた磁器が多量に含まれています。

その種類は、碗・皿・鉢・<sup>ちよこ</sup>猪口・<sup>とっくり</sup>徳利・<sup>きゅうす</sup>急須・段重箱・<sup>れんげ</sup>瓶・蓮華など多種多様です。また、膳・漆器碗・箸などの木製品や、調味料の容器としても用いられた焼塩壺と

いわれる土器もみられます。これらに加え、<sup>どなべ</sup>土鍋・<sup>すりばち</sup>挿鉢・<sup>こんろ</sup>焜炉・<sup>ほうろく</sup>焙烙などの調理具、甕や壺などの貯蔵具も豊富です。

このように、陶磁器を初めとする多くの厨房具が出土したことから、江戸時代終わりごろの久留米藩、特に城下を中心とした地域でも、当時の食生活が多様化していたことがわかります。その背景には、全国的な米・野菜などの生産力の向上や漁業の発展、酒・醤油などの調味料の充実があり、水運を中心とした交通網の整備・発達とあいまって、江戸時代の中でも比較的豊かな食生活が営まれたと考えられます。



1 各種調理器具（写真上）、染付・色絵の茶碗（中）、染付大皿（食器）。

2 煎茶を飲む器（写真上）、各種酒器（中）、店名と所在地が書かれた貧乏徳利（下）

江戸時代の化粧は、白は白粉、黒はお歯黒、赤は紅の3色が中心です。色鮮やかな紅は紅花を練り固めたものを加工し、抽出して作られていました。大変高価なので、磁器の紅猪口・紅皿に少量ずつ刷毛で塗り売っていました。紅猪口は専用の小ぶりの磁器杯の他、普通の猪口に紅が塗られている場合も多く、久留米城下の発掘調査で出土するものにも、このタイプが多くみられます。

また、女性が身に纏うものに髪飾りがあります。江戸時代は結髪史上最も華やかで種類の豊富な時代であったようで、本来結上げ道具として使われていた筍や櫛は序々に装飾性の高いものへと変化を遂げていきます。簪も玉

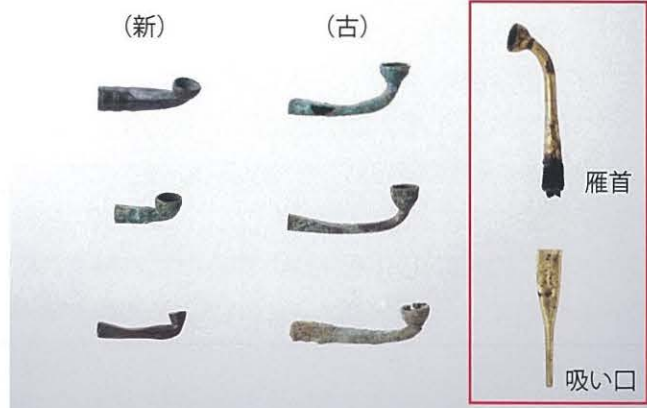
簪などのシンプルなものから銀丸肩平打簪などの装飾的なものなど様々です。

男性が身に纏うものには、根付があります。腰に揚げた袋物の落下を防ぐためのもので、わずか5cm程度の大きさに様々な意匠を凝らしてセンスを競っていたようです。

この他、男女共通のものには、履物があります。草履・雪駄・下駄・草鞋などの種類がありますが、江戸時代の一般庶民層が、裸足から履物をはくようになった背景には、畳の普及があります。また、下駄の種類には連歯下駄や差歯下駄などがあり、差歯下駄は歯を付替えることで長く使用できるものでした。



1 井戸からは下駄などの木製品が出土することも多い。



2 キセルの雁首も時代によって形が変わる。



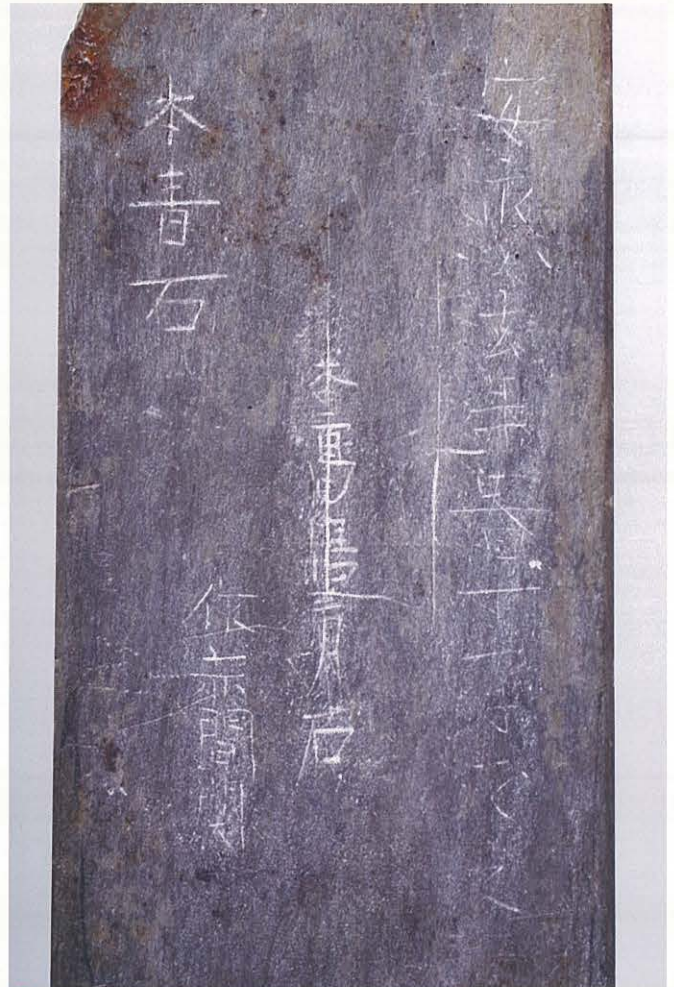
3 化粧道具。化粧の基本は白粉。色の白さが美人の条件であった。これに紅をのせ、艶やかさを演出。

# 文具

江戸時代の筆記用具は、『文房四宝』(筆・墨・硯・紙)が代表としてあげられます。その他にも、硯箱や筆架・硯屏・文台・水滴などが文具に関連するものとしてあげられます。これらは、腐りやすい木や紙でできた物が多いため、石製品の多い硯と陶磁器などで作られる水滴を除き、遺跡から見つかることはあまりありません。

硯は、江戸時代になると石製品が主流となります。城下から発見される硯も例外ではありません。形は長方形のものが多く大きさは大小様々なものがあります。江戸時代の有名な硯の産地として、近江(滋賀県)の高嶋と周防(山口県)赤間が挙げられます。高嶋石は青(緑)色、赤間石は小豆色を特徴とし、城下からも、高嶋石・赤間石と考えられる青や小豆色の硯が見つかっています。

京隈侍屋敷遺跡第3次調査地点からは、硯2点と硯屏・文字が書かれた土器が発見されています。硯は、黒色で塗られたものと赤く塗られたものがあり、黒色の硯には朱墨が、赤色の硯には墨が残されていて、使い分けされていたようです。また、朱墨用硯の背面には、「安永八年(1779)に購入した硯は、高嶋石を赤間関(下関)で作った」と記されていて、硯の二大産地名「高嶋」「赤間関」が書かれています。真偽の程は定かではありません。



1 硯の裏面に書かれた由来(本文参照)。

硯屏



水滴



硯各種



2 明治41年(1908)に公文書でのインク使用が認められるまで、墨・筆は筆記用具として欠かせないものだった。

江戸時代には、文化の発展にともなって庶民の遊び文化が発達しました。子供用の玩具が作られ始めたのもこの時代からです。玩具には、紙製・布製・金属製・木製・陶磁器製・土製・石製などがあります。久留米城下の遺跡からは、木製・陶磁器製・土製・石製のものが見つかっています。種類は、人形、ミニチュア製品、泥面子、木製人形、羽子板、独楽、碁石、将棋の駒などです。

玩具の中で、最も多く発見されるのは人形・泥面子とミニチュア製品です。人形は、陶磁器・土・木などの材質で作られており、「人形遊び」や「ままごと」に使われていました。木製人形には、繰り人形や指人形など頭部

が多いようです。泥面子には、面摸<sup>めんがた</sup>・芥子面<sup>けしめん</sup>・面打<sup>めんちよう</sup>などの種類があります。面摸は、型のくぼみ部分に土を入れて形を作るもの（形押し）。芥子面は、指先につけて指人形として遊ぶもの。面打は、面子あるいはおはじきのように使って遊んでいました。

ミニチュア製品には、「ままごと」道具・「箱庭」道具があります。ままごと道具には、磁器製から土製のものがあり、食器などを精巧に小型化しています。箱庭は、箱や盤に木や石などで小さな庭を作ります。そこには、橋や灯籠などが飾り付けられます。城下からもよく発見されることから、盛んに作られていたのでしょう。



1 箱庭。灯籠や建物などミニチュアを配置しあそぶ。



2 土人形。西行法師・狐・狛犬・大黒様など種類も豊富。



3 ミニチュアのままごと道具。かまどや鍋、食器類など本物そっくりの出来映えだ。

# 銭

江戸時代の『銭』には、大きく分けて金貨・銀貨・銅貨の3種類があります。金貨には、大判・小判・八両判・五両判・二分金・一分金にしゆぎん・一朱金などが、銀貨には、丁銀ちようぎん・豆板銀まめいたぎん・五匁銀ごもんめぎん・南鐐銀なんりようぎん・一分銀・一朱銀・二朱銀などが、銅貨には、江戸時代初期の慶長通宝けいちょうつうほう・元和通宝げんなと、それ以降の寛永通宝かんえい・宝永通宝ほうえい・天保通宝てんぽう・文久永宝ぶんきゅうえいほうがあります。この内、金貨は江戸を中心とした東日本で、銀貨は大阪を中心とした西日本で流通していました。寛永通宝を代表とする銭貨は、全国で流通しています。

久留米城下の遺跡から発見される『銭』のほとんどは、

寛永通宝です。寛永通宝の『宝』部分は、本来『寶』と書かれています。寶の下部が『ス』と書かれた古寛永と、『ハ』と書かれた新寛永との2種類が存在します。古寛永は1656年まで作られ、新寛永は1668年以降に作られたとされていて、遺跡の年代を測る「ものさし」の一つになっています。

また、城下町の銭の出土数を見てみると、武家屋敷地からはあまり銭が出ず、町屋から多くの銭が見つかる傾向にあります。「武士は食わねど高楊枝たかようじ」という言葉があるように、武家より商家のほうが裕福であった状況が遺跡からも見え隠れしています。



1 町屋跡から出土した二朱金。



2 「古寛永」(左)と「新寛永」(右)



3 参政不破美作邸跡から出土した各種銭貨 [久留米城外郭遺跡第7次調査]。



## —遺跡から出土した弾丸を追う—戦い

平成 21 年 9 月のよく晴れた日のことでした。JR 久留米駅西口前の発掘現場で、奇妙な金属の塊が出てきました。

「なんか変なもんが出よるよ。」

作業員さんの一声が全ての始まりでした。直径 60cm ほどの穴から、竹の子を小さくしたような物がいくつも顔を出しています。「なんだ?これは?」不思議に思い手に取ると、ずしりと重い感触。「鉛のようだな?」「後ろの方には溝があるみたいだけど?」などと考えながら土を落とすと、小さな砲弾型をしたものが姿を現しました。

「なんか弾のような・・・、うん、これは銃弾だ!」

そこからは、大騒ぎです。結局出る出るわで、計 46 発もの鉛の銃弾が発見され、市役所や警察に通報したり、交番に出向いたり大変な一日になりました。

その後この弾丸は、幕末から明治初期に使われていた銃のもので、危険性はないことが判明しました。同時に、当時最新鋭のライフルに使用されたものであることもわかりました。弾丸が出た場所には、江戸時代には『可児』家の屋敷が所在していました。可児家の一族には、戊辰戦争に従軍した、可児鍋喜久なべきくや可児治右衛門じうえもんがいます。彼らは、東北にまで遠征し戦いを生き抜きます。もしかすると、この弾丸も戊辰戦争の戦場から持ち帰られたものかもしれません。結局のところ、なぜ弾丸が未使用のまま埋められたかは定かではありませんが、幕末の動乱期の

状況を 150 年あまりの年を経て今に伝えています。



1 小銃弾の出土状況。不定形に掘り込まれた穴の中からバラバラの状態で見つかった。



2 弾の全長は約 25mm、径 13.2mm。



3 建設が進む新幹線久留米駅西口と発掘中の可児家屋敷跡 [京隈侍屋敷遺跡第 18 次調査]。

## 近代へ - ガラス瓶から見たく め -

城下町の調査では、明治時代以降の地層や遺構からガラス瓶が多量に出土します。特に明治末～大正時代になると種類も増え、一般家庭へも普及していたことがわかります。様々な用途の瓶がありますが、自動製瓶機が導入される以前の製品は、形が歪み、気泡が入り、厚さも不均一など、大変味わいがあります。注目したいのは、表面にエンボスが残る物で、商品名・製造会社名・ロゴマークなどから多くの歴史的情報を得ることができます。

一方でガラス瓶は液体を漏らさず、酸やアルカリなどの腐食にも耐え、様々な形に成形、色つけも可能です。最後は再び溶かしてリサイクルできるなど、素材革命と

もいえる優れた特徴を持っています。また、無菌状態で密封すれば中身の腐敗を防ぎ、長期保存と長距離移動が可能となります。これは、商品の生産や流通の観点からも非常に有利ですし、消費者側の清潔志向ともマッチしたようです。ガラス瓶は江戸時代以来のライフスタイルを近代化へと導いたといえるかも知れません。

この流通を支えたのが鉄道でした。明治23年(1890)に九州鉄道の久留米停車場(現 JR 久留米駅)が開業し、物資の輸送は、それまでの若津港を中継地とする筑後川を利用した水運から鉄道へと移行していきます。こうしてガラス瓶は、久留米へと大量に流入してきたのです。



1 化粧品瓶。大正時代には各社が大々的なキャンペーンやタイアップ等の宣伝広告を行い販売競争が激化した。



2 手前2列が薬瓶。マキを燃料としていたため近代では眼病もたびたび流行した。目薬瓶も数多く出土する。



3 明治末～昭和初期の酒類・飲料水・調味料・化粧品・インク・薬瓶。用途により多様な形と色がある。

## ■久徳与十郎（きゅうとく・よじゅうろう／1820-69）

〔政治家〕藩士久徳第三郎の次男として京隈小路四番目筋に出生。元治元年公武周旋役として上京、会津・薩摩など在京諸藩士や公家とも広く交流した。禁門の変に際しては隊長として長州軍と戦い、勇猛果敢な奮戦ぶりからその名が知れ渡った。時の二条関白から感状、朝廷からは下賜品があった。藩も五十石加増して百七十石とし、側物頭に昇進させた。元治・慶応期における諸藩士との交流を記した「日記」は、久留米藩の政治動向を知る上で重要な資料である。しかし尊攘派の水野正名が復権すると、揚屋（牢獄）入りとなり、明治2年1月、開明派の今井栄らとともに屠腹を命じられた。墓は寺町妙正寺。なお、京隈小路に在住した殉難十志士には、松岡伝十郎・北川巨・本庄忠太がいる。

## ■坂本繁二郎（さかもと・はんじろう／1882-1969）

〔洋画家〕藩士坂本金三郎の次男として京町小松原に出生。久留米高等小学校ではロマン派の洋画家青木繁と同級だった。明治33年から同校の図画代用教員を務め、同36年上京し太平洋洋画研究所に学ぶ。大正3年二科会の設立に参加し、同10年渡仏してシャルル・ゲランに師事した。同13年に帰国後、櫛原町に住み、昭和6年には八女市に移住、緒玉にアトリエを設けて制作に専念した。その生家は、京町で保存・公開中であり、アトリエも石橋文化センター内に移築復元されている。代表作に「帽子を持てる女」「放牧三馬」など。

## ■城 数馬（じょう・かずま／1864-1924）

〔法律家〕京隈小路四番目筋に出生。代々人見流馬術指南役を務める家系。その祖父九十九は妙技を極め、高弟には「くるめつつじ」の始祖坂本元蔵などがいる。東京帝国大学卒業後、司法省勤務を経て、大審院（旧法下の最高裁）書記長、代言人（弁護士）、東京市議会議員・同副議長、東京弁護士会副会長などを歴任。明治41年、半島へ渡り、京城控訴院長などを務めた。高山植物に造詣が深く、八ヶ岳で発見した新種に、祖父名をとって「つくも草」と命名した。日本山学会設立発起人の一人でもあり、会員第1号。梅林寺に葬られる。

## ■日比翁助（ひび・おうすけ／1860-1932）

〔事業家〕藩士竹井安太夫の次男として櫛原小路に出生、のち京隈小路一番目筋の日比家の養子となる。上京して慶應義塾に学び、三井銀行副頭取を経て、明治37年三越呉服店の初代専務取締役役に就任した。明治39年には欧米諸国の百貨店を視察、ロンドンの大百貨店ハロッズ

の経営に影響を受け、大正3年日本初のエスカレーターやエレベーターを備えた近代的なデパート三越百貨店を開店した。同店取締役会長。日本にボーナス制度を導入したことでも知られる。

## ■水野正名（みずの・まさな／1823-72）

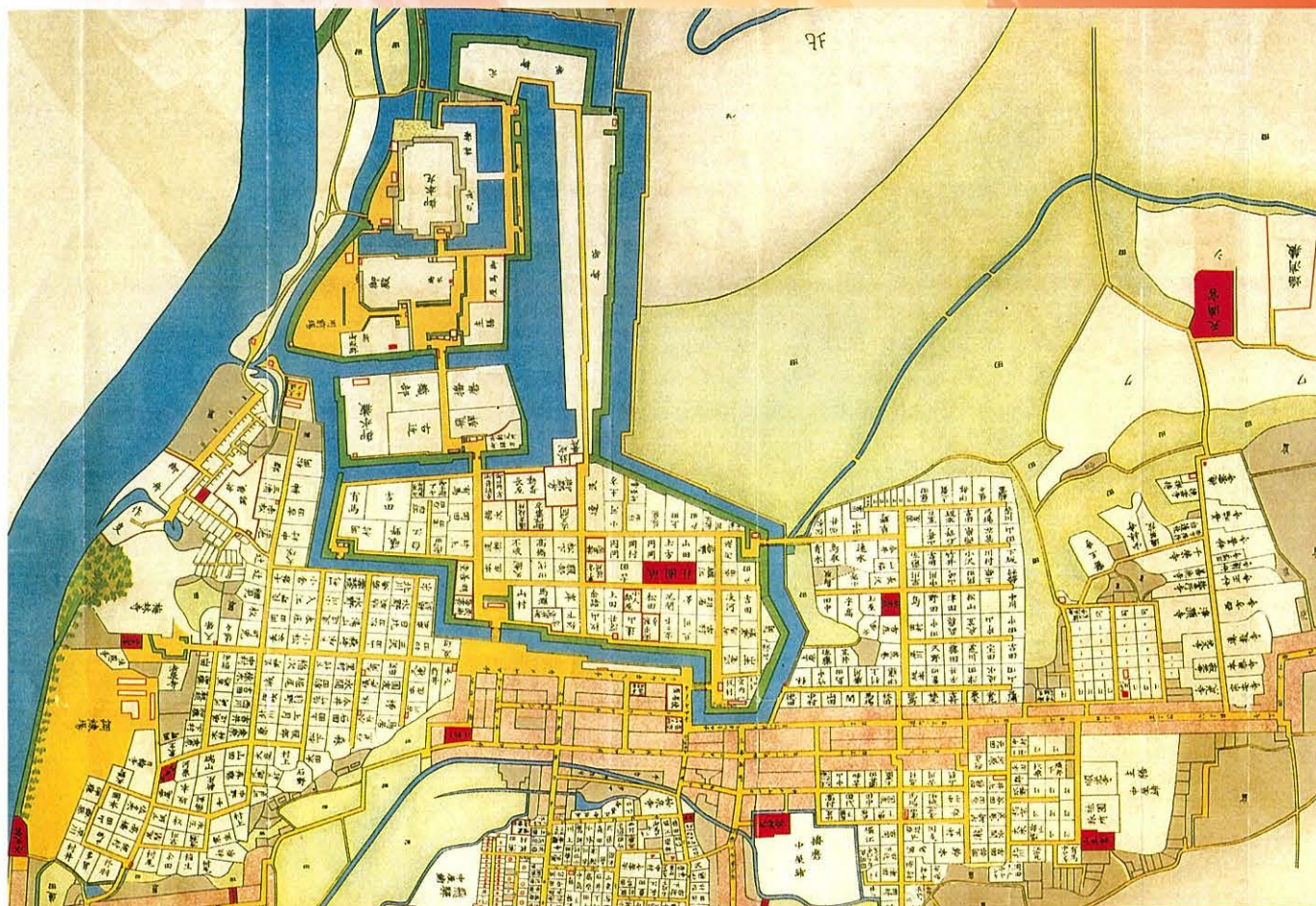
〔政治家〕京隈小路二番目筋に中老水野正芳の長男として出生。天保14年、奏者番となる。藩尊攘派の中心人物として真木和泉と活動を共にしたが、嘉永の大獄で失脚、幽囚12年に及んだ。文久3年に解囚され上京、学習院御用係となる。同年8月の政変で三条実美ら七卿と長州へ落ち、太宰府へ随行した。明治元年、国元で参政不破美作が暗殺されると復権、中老となり尊攘派政権を組織、宿敵の公武合体・開明派を弾圧した。明治2年、版籍奉還にあたり藩大参事となったが、同4年の藩難事件で罪に問われ終身禁獄、同5年青森県弘前で獄死した。墓は野中町の隈山墓地。なお、水野家は嫡子正名が長く幽囚されていたため、高橋家より又蔵が嗣子となった。彼は応彦隊総督となったが、海難事故に遭い消息を絶った。その子敏之丞は京都帝国大学理科大学長、学士院会員で、久留米出身理学博士の第1号。

## ■矢野一貞（やの・いっせい／1794-1879）

〔学者〕藩士早川平右衛門の次男として、京隈小松原に出生。文政10年、矢野家の養子となり二百石馬廻役を相続する。藩校明善堂出役後、開物方、御先手物頭格、神祇改調役等を歴任。その間、ほぼ独学で和漢の書籍を読破し、博覧強記の人となった。一方、筑後国内の古墳や遺跡などを現地調査し、古社寺や旧家を尋ねて、遺物や文書類を筆写して整理した。近代的な歴史研究に先駆けた実学の成果は、『筑後将士軍談』をはじめとする多数の著作として結実した。明治12年、コレラに罹患し永眠。実家早川家の菩提寺、野中町正源寺には顕彰碑が建つ。

## ■山田稔養（やまだ・いねやす／1850-1907）

〔実業家〕藩士山田忠兵衛の長男として京隈小松原に出生。幼名は正之助。元治元年に対長州小倉戦争に出征、慶応3年には坂本金三郎とともに江戸の勝海舟塾と海軍操練所で学ぶ。翌年帰藩し、藩海軍の雄飛丸・千歳丸の乗組員となり、戊辰戦争に参加する。その後アメリカ留学の志を起こし、翌明治元年11月、海外渡航券第1号を取取得して、ハーバード大学法学部へ入学した（東洋人留学生初）。卒業後、アメリカで法律事務の仕事に携わるが、明治18年に帰国、横浜税関で勤務ののち海外貿易に力を注ぎ、日本貿易協会会長などを務めた。



天保年間(1830-44)久留米城下図〔部分〕